

これから論文を書く若者のために(究極の大改訂版)

著者(所属)：酒井聡樹(東北大学大学院生命研究科)

出版社：共立出版株式会社

私は常々、学部卒研究生や大学院生が初めて私の研究室を訪れた際には、「研究＝論文の公開(研究の完結)」であると説明している。これは、私が研究者としての道を初めて歩み出した頃に、自分の研究指導者から諭されたことがその根源となっている。その指導者は、「生命科学領域の研究であれば、総説は別として原著は必ず国際誌(英文誌)へ投稿すべきであり、国際誌へ投稿できないような研究は行うこと自体が意味をなさない。しかも国からの助成金を原資として行った研究であれば、原著を和文で投稿することは、ある意味“犯罪行為に近い”」とまで言われたことを今でもはっきりと覚えている。“犯罪行為”は言い過ぎかもしれないが、生命科学領域の研究は、人類のためのものである以上、(残念ながら)事実上の共通言語となっている英語で書くことが求められるということである。

一方、本誌「臨床検査学教育」は、我が国の臨床検査技師教育に特化した雑誌であることから、原著も日本語で書くこととなっている。論文を書くためには、その論文を書く前に「なぜ、何のためにその研究をするのか」を十分に整理・理解しておかなければ、どこの国の言語であろうと論文にまとめることはできない。今回紹介する書籍「これから論文を書く若者のために(究極の大改訂版)；2015年4月25日発刊」は、共立出版から2002年5月に初版が上梓されたもので、著者本人も生命科学領域の研究者である。初版が第16刷まで、大改訂版が27刷まで発刊されており、本書は間違いなくベストセラー本であることがわかる。この本の中には、冒頭で私が述べた内容が非常に丁寧かつ分かり易い比喻も交えて記述されている。本書は4部構成となっており、第1部では、なぜ論文を書くのかということと、論文に関するいくつかの基礎知識が説明されている。第2部では、論文書きの実践編であり、本書の核となる重要な部分である。第3部では、いかに論文を書き上げるか「執筆に向かう姿勢」に関する助言が書かれている。最後に第4部では、分かり易い論文を書くコツと面白い論文の条件が紹介されている。また、本書の文脈を「アルプス一万尺」の替え歌(タイトル：論文書きの歌 2015)として、1番から20番(+アンコール)までユニークで、なおかつ非常に重要なポイントを押さえた歌詞として表現されており、これには思わず苦笑してしまった。しかし、自分の過去の経験と重ね合わせると、まさにストライクゾーン高めの直球で三振取られた感じで、むしろ清々しささえ覚える。今回の大改訂では、特に第2章が大幅に改変され、旧版では著者の専門領域の生態学にやや偏った内容だったものが、新聞の科学欄に掲載されるような一般的な事例を用いて分かり易く解説されている。旧版当時から、取り組む問題と結論とを対応させるためには、取り組む問題を結論に合わせていくことが必要であることが強調されている。その事例として「なぜ、ベガルタ仙台は強いのか？」という問題に取り組むために研究をしたとして、その結論として「(仙台名物の)牛タン定食を食べているからである」を導き出すまでの過程を順序立てて解説され、それぞれの過程で重要な論理展開が丁寧に説明されている。

現在、私共は6名の編集委員で「臨床検査学教育」誌の編集に携わっており、様々な原稿を拝読する機会が与えられている。これは私自身にとって「よい論文とはどのようなものか」を再確認する非常によい経験にもなっている。会員の先生方が、これまで多くの論文を書かれていることは自明の理であると承知している。論文執筆に関して既にご自身のスタイルが出来上がっていたとしても、本書は見聞の価値があると思う。特に若い世代の会員の先生方が本書を一読され、「臨床検査学教育」誌に多くの論文を投稿して頂くことを心より願う次第である。

(熊本大学大学院生命科学研究部 奥宮敏可；okumiyat@kumamoto-u.ac.jp)